

第七章 赤い輪

ルッカ夫人は話を続け、私たちは皆、耳を傾けた。

「ある晩、ジェンナーロは、上の方に赤い輪が書いてあるゴルジアーノからの手紙を私に見せてくれました。ある日に重要な会合があり、ジェンナーロは行かなくてはならないと書いてありました。これは恐ろしいことでした、でもそれからもっと悪いことが起きたのです」

「ゴルジアーノはいつも夕方に私たちに会いに来ました。彼は私に話しかけることが多く、私はそれが気に入りませんでした。彼はいつも私のことを大きな醜い目で見ていました。私はどうしていいかわかりませんでした。そしてある夜、私が一人きりのときにゴルジアーノが私たちの家にやって来ました。ジェンナーロはまだ働いていて、ゴルジアーノは私に彼の秘密を話したのです。彼が私を愛していると！ 彼は私を大きな腕の中に抱き寄せ、私にキスしました。それは恐ろしく、私は悲鳴を上げました。そのとき、ジェンナーロが家へ帰って来て、私を助けようと思いました。ジェンナーロとゴルジアーノはひどくやり合い、ゴルジアーノはジェンナーロを打ちのめして、逃げて行きました。彼は私たちの家へ二度と戻ってきませんでした。ゴルジアーノは私たちの危険な敵となったのです」

ルッカ夫人は少しの間黙り、私たちを悲しげな目で見た。

そして彼女は続けた。

「数日後、赤い輪の会合があり、ジェンナーロは行かなくてはなりません。戻ってきたとき、夫の顔は青ざめていました。お金を得るために、秘密結社はニューヨークに住む裕福なイタリア人をゆすっていました。赤い輪は支払わなかったイタリア人にひどいことをしました。彼らを殺しさえしたのです！」

「赤い輪は私たちの友人のティト・カスタロッテさんに手紙を送り、支払うよう言いました。彼はおびえ、そして怒ってゴルジアーノと赤い輪についてニューヨーク警察に伝えました。ゴルジアーノはひどく腹を立て、カスタロッテさんの家を爆破しようと決めました。赤い輪の役員たちは、それをするのにジェンナーロを選びました。夫は自分の親友を殺さなければならなかったのです！」

「私のかわいそうなジェンナーロは恐怖におびえていました。夫はいい人なのです、殺人者ではありません。夫は私を見て、『もし僕がカスタロッテさんを殺さなければ、ゴルジアーノは僕たちを殺すだろう！』と言いました」

「恐ろしい夜でした。ジェンナーロと私はとても、とてもおびえていました。私たちは眠れず、どうしていいかわかりませんでした。私たちはゴルジアーノ、赤い輪、カスタロッテさん、そして私たちが持つあらゆる問題について一晩申話しました。最終的に私たちは、ニューヨークにいるのは危険すぎる、すぐに去らなければならないと決心しました。でもどこへ行ったらいいのでしょうか？ 私はボシリッポへ戻りたかったのですが、ジェンナーロがそれは不可能だと言いました。そこには、ゴルジアーノの友人と、他の赤い輪の役員が大勢すぎたのです。それで私たちは、大きな都市で誰も知り合いがいらないということから、ロンドンへ出発することに決めました。次の日の朝早く、太陽が昇る前に出発しました。私たちは何も持ってきていませんでした、私た

ちが出ていくことを誰にも気付かれなくなかったので、洋服と書類だけです。私たちは港へ行きましたが、前もって、ゴルジアーノの恐ろしい計画について伝えるために、カスターロッテさんと警察にメッセージを送りました」

「あなた方はすでに残りの話は知っていますね。ゴルジアーノはロンドンまで私たちを追ってきて、それでジェンナーロは私が隠れるための場所を見つけました。夫はイタリア警察に話しに行きたいと思っていました。この間ずっと、私は一度も夫に会っていません。私は夫がどこに住み、何をしたのか知りません。ジェンナーロからの唯一の知らせは新聞の中のメッセージでした。そしてある日、私は窓から通りにいる二人のイタリア人を見ました。それはゴルジアーノともう一人の男でした。彼らはこの家を眺めていました。私は一人でしたし、ひどくおびえました」

「私は新聞でジェンナーロのメッセージを読みました。私は窓際で夫の信号を待ち、それを見ました。ゴルジアーノが近くにいたので、大きな危険があることが私には分かりました。幸いにも、ジェンナーロは彼が来たときに備えていました。さあ、あなた方は全てのいきさつを知ったので、すー長く悲しい物語を」

「さて、グレグスンさん」とアメリカ人の探偵が言った。

「今や私たちは一部始終を知っています。あなたはどう思いますか？」

「ジェンナーロ・ルッカは男を一人殺しました。ルッカ夫人は、私と一緒にスコットランドヤードに来ていただかなくてはなりません」とグレグスンは言った。

「警察本部長が彼女の話聞き、彼女の夫と話さなくてはなりません。それから彼が、どうするかを決めるでしょう」

「さて、ワトソン」とホームズが言った。

「私たちの仕事は終わったし、もう行く時間のようだ」

ホームズはエミリアと男たちの方を向き、「皆さん、ごきげんよう」と言った。

ホームズと私は立ち上がり、コートを着て去った。

ウォーレン夫人の家を出たのは寒い夜のことだった。